様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０６６４

研究課題名（和文）Ｌｅａｒｎｉｎｇ　Ｃｅｎｔｅｒ　Ｎｅｅｄｓ　Ａｎａｌｙｓｉｓ

研究課題名（英文）Learning Center Needs Analysis

研究代表者
Ｖｙｅ　Ｓｔａｃｅｙ（VYE, Stacey）

埼玉大学・英語教育開発センター・准教授

研究者番号：５０５１３８６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,200,000円、（間接経費）　660,000円

研究成果の概要（和文）：学習者が自律的に設計した学習計画と、改善が望まれる学習技能に費やしたと自己申告された時間が、IELTSの4技能のセクションにて習熟度を高めるのに貢献するかを研究した。英語学習者である大学生ボランティア20人の学習開始前と学習後のテスト結果と、自律学習実践のデータを関連させた。彼らは23週、週1回90分のゼミで集まった。データは、学習者の省察、出口調査、本研究者の記録、学習前後のIELTSのスコアを含む。研究では制約もあったが、楽しみのため自己選択した学習に週6.5-8.5時間以上、向上させたい分野に活発に従事することで、習熟度が高まるという結果を得た。自律学習は語学熟達に利点があると示唆する。

研究成果の概要（英文）：This research asks if language study-plans designed autonomously by learners and self-reported amount of time spent on the desired four-skill(s) contribute to greater language proficiency on the four-skill sections of the IELTS test. To achieve this aim, the results of pre- and post-IELTS tests of 20 EFL volunteer university students and the data was correlated with their autonomous language learning practices. The participants met in seminars for one weekly 90-minute learner-conducted session for 23 weeks. The data included the students ' reported reflections on their self-study, an exit survey, field notes, and the pre- and post-IELTS test scores. The limitations were significant, yet the results indicate that participants made proficiency gains by actively engaging in self-selected language study for enjoyment by partaking in 6.5 to 8.5 or more hours per week on the language skills they want to improve, suggesting there is merit for proficiency gains through autonomous study.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：学習者の自律　自主学習　英語力　IELTS　必要性の分析　テスト及び評価

１．研究開始当初の背景

（１）過去 30 年間、言語教育分野の研究者は学習者の自律理論の考察を網羅的に深めてきており、教室の現場における学習者の自律の実践に関わる示唆に富む研究成果が着実に現れてきている。しかし、学習者の自律と言語習熟度との関連に焦点を合わせると、言語習熟度を測定する学習者の自律研究はこれまでになされてはいるものの（以下を参照　Kurugöllü, 2013; McCarthy, 2014）、その数はきわめて少ない。だが、数多くの学習者が個人的な理由、あるいは職業的な理由で、英語の集団基準準拠テストのスコアを向上させることを望んでいると考えることができるので、この領域における学習者の自律研究には意味があると考えられる。

（２）また、学習者の自律過程について、これまで詳細な分析がなされてきており、学習者のフラストレーションを減少させることが、学習者が言語学習の内容について、支配する能力を高める点が強調されてきた（以下を参照　Graves & Vye, 2011; Vye, Barfield & Anthanasiou, 2010; Vye, 2009）。しかしながら、学習者の自律を促進しながら、英語の習熟度の変化を測定することは、これまでかならずしも考慮されてこなかった。したがって、本研究の文脈における学習者の英語４技能の発達を研究し、その結果を言語教育と言語学習における自律をテーマとするより大きな研究コミュニティと共有することが重要であると考えた。

２．研究の目的

（１）　本研究者に期待される主たる教授目的は、高等教育レベルでの TOEIC，TOEFL，IELTS 等の英語の集団基準準拠テストにおいて 4 技能を改善するように学習者に促すことであるので、当然ながら、学習者としての学生の自律を高める上で本研究者が果たすべき役割について、まず考察を行った。

（２）続いて、以下の問いを立てて考察することにした。言語学習センターである English Resource Center で学習する 20 名の日本人、外国人の大学生によって自律的に設計された学習計画と、改善が望まれる学習技能（リスニング、リーディング、ライティングかつ／またはスピーキング）に費やしたと自己申告された時間は、IELTS の４技能のセクションにおけるレベル帯で、より高い言語習熟度が測定されるのに貢献するかどうか、である。

３．研究の方法

（１）参加者：科学と人文学を専攻する２０名の大学生。女性が１１名、男性が９名である。２０名の内１６名が日本人であり、残りの４名については、３名がマレーシア、１名が中華人民共和国からの留学生であった。本研究への参加者全員が、英語と日本語による同意文書に自発的に署名した。本研究者も学習者のプライバシーを守ることに同意する文書に署名した。

（２）研究の期間：２０１１年の１１月から２０１２年の７月までの２３週間、学習開始前に IELTS を受験し、学習後に IELTS 受験した後まで、それぞれの参加者は本研究者と週に一度９０分会った。興味深いことに、２０名の参加者の内、１９名が、英語を正課として教える他の国で正式に英語を学習することに何らかの関係があった。７名の日本人参加者は以前に外国で学んだことがあり、８名

の日本人学生は、２セメスターの間、交換留学生として留学する予定で準備をしているところであり、４名の外国人は、現在日本に留学して学習している。

（３）学習開始前の IELTS 受験と、学習後の IELTS 受験：IELTS が選ばれたのは、IELTS が、学習者のリスニング、リーディング、ライティングとスピーキングの能力を評価するものであり、言語学習センターで学習する本研究の参加者には最良の評価ツールと考えられたからである。その理由は、IELTS が参加者がもっとも改善したいと考えている２つの技能であるスピーキングとリスニングの両方を測定するだけでなく、スピーキングの習熟度を、テストを受ける不安を緩和するコンピュータを使うことなく、面接官と直接に話すことにより測定することにある。

（４）セミナー・セッション：言語学習センターに来た参加者は、個々人で、あるいは協同して、学習開始前の IELTS 受験と学習後の IELTS 受験のあいだに行う、自ら選択した英語学習計画を設計するよう求められた。参加者は小集団のセミナーで２３週の間、週に１度集まった。それぞれのセミナーの参加者は、４名から７名であった。本研究の開始時には、参加者の英語習熟度は、IELTS の全体のスコアで 4.5-7.5 であり、活発に英語学習に取り組んではいたものの、大多数は、自身の英語能力に自信が持てない状態にあった。こうした要因から、本研究者は、セミナー・セッションにおいて、より強い自信を持ちながら英語学習を進めていくために、もっと自らの内にあるもの見いだすことができるように、こうした学習者を支援することに焦点をあて、そのことにより、参加者の仲間からの支援、また仲間ほどではないにしても本研究者からの支援も受けながら、確かな情報に基づく選択を行い、自分自身の学習戦略が立てられるよう配慮をした。

（５）セミナー・セッションの外で自主的に学習する学生：セミナー・セッションの外では、参加者は個々に意図した、それぞれのニーズにもっとも合致した学習計画を立てた。それから、自らがどのように言語学習を発展させたかを自己学習についての自己申告による省察の形で記録し、また何を練習し、学習したか、またそれぞれの活動におおおよそ週に何時間を使ったか、また、学習した内容について省察した後の学習目標に何を設定したいか等を出口調査の形で聞き取り、記録した。それから参加者は、学習していることについて、セミナーの仲間と情報を共有し、新しい発想や、学習戦略を生み出し、自らの経験についてフィードバックを得た。

記録された自律的な言語学習は主に以下のものがあった。

a)　インターネット上の、権威ある、「評価の高い」サイトや、言語学習センターにある教材を使用する。

b)　友人と一緒になって英語を使って時間を過ごす。

c)　交換留学生が、留学先の国に住む人々に聞かれることが予想される質問に備えるために、日本文化について勉強する。

d)　音読やシャドウイングの要素を入れた、エクステンシブ・リーディングを行う。

さらに、主に自発的に楽しむことを目的とした英語学習の方法と、その学習に費やす時間は、参加者のあいだで多様性が見られた。

（6）データの対照：学習後の IELTS 受験が終了した後、IELTS の 2 回の試験で測定された言語習熟度が改善した領域と、学習者の言語学習に関する省察、本研究者による出口調査と考察ノートの記録を対照させた。

4．研究成果

以下に、データから導き出される結論を述べる。

（1）リスニングの習熟度の結果：20 名の参加者の内 18 名が、オンラインのリスニング・ビデオ、ポッド・キャスト、DVD を使用して，個人の楽しみを目的として、自らリスニングの活動を行ったと述べた。彼らの内 10 名がリスニングのスコアで、＋0.5 の増加が見られたが、4 名のスコアには変化がなかった。9 ヶ月間の実践を通して共通して言えることは、自ら楽しみながら行った活動のリスニングの時間が、週に 7.5 時間かそれ以上の場合は、IELTS のスコアは改善したか、同じであり、このことは、楽しみを目的としたエクステンシブ・リスニングの有効性を示唆している。

（2）スピーキングの習熟度の結果：シャドウイングや、友人、知人との会話を通して、18 名の参加者が練習をした。少なくとも週に 8.5 時間を使った 10 名は、(時には大きく）スピーキングのスコアが上昇した。　3 名は＋1.5、2 名は＋1.0、5 名は＋0.5 上昇させた。

（3）ライティングの習熟度の結果：15 名の参加者が、楽しみを目的としたソーシャル・メディア、E メール、かつ／またはエッセイ・ライティングの練習という自律的学習により、ライティングの習熟度を高めることを選んだ。1 名の参加者は＋1.5 上昇し、3 名が＋1.0、5 名が＋0.5 上昇した。この 9 名の学習者に共通した特徴は、もしライティングに費やした時間が週に 6.5 時間か,それ以上であれば IELTS のスコアが上昇したということである。

（4）リーディングの習熟度の結果：参加者の専攻科目と選択科目で課される、広範な英語のリーディングの量が増えているため、セミナーの外での読書時間を測定することが残念ながらできなかった。こうした科目は日本語で講義されるが、英語でのリーディングの量を増やす傾向にあり、このリーディングに費やされた時間を本研究者が測定することはできず、IELTS のリーディングのスコアと対照させることはできなかった。

（5）留学の要因と結果：20 名の内 19 名が、以前に留学経験がある、あるいは英語を使っての留学準備をしている学生であり、言語学習センターに集まる一般の学生とは大きく異なり、このことと、習熟度の変化には一定の相関があることが推測される。

（6）海外旅行への意欲と結果：（5）と関連するが、参加者が海外旅行、交換留学、かつ／または外国での非営利組織でのボランティア活動に関わる情報を共有したことで、自然に旅行が活発に行われるようになり、本研究期間中に、20 名の内 13 名が 16 の異なる国々を訪問した。このことは、学習者が社交的な文脈に置かれることで、セミナーでのテーマが明確な討議を生みだし、言語学習を超えて個々の人生に影響を与え、海外旅行の頻度を増やすことにつながったと考えられる。

（7）全体としての結論：参加者の人数に制限があったこと、研究期間が 9 ヶ月（23 週）と短かったこと、4 技能は相互に関連していて、完全に分離して考察することは不可能で

あること、参加者が、参加以前に一定の学習者の自律を獲得していたこと、といった制約が本研究にはあった。しかしながら、学習者がもっとも向上させたいと考えている領域あるいは複数の領域で少なくとも週に6.5時間から8.5時間かそれ以上、楽しみを目的として自ら選んだ言語と活発に接触することによって、参加者の言語習熟度が向上したことを結果は示していると考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① Vye, S. (in-press). From learner autonomy in practice to learner proficiency in theory. *KOTESOL2013 Proceedings: Exploring the Road Less Traveled: From Practice to Theory, 21*.

② Vye, S. (2014). Saitama University students presented short papers in English at Gakushuin University to an international English audience. 『**武蔵野：埼玉大学図書館**』15 **巻**, 13-18.

③ Vye, S. (2013). From learner autonomy in practice to learner proficiency in theory (Extended Abstract). *KOTESOL 2013: Exploring the Road Less Traveled: From Practice to Theory, 21,* 170-173.

④ Vye, S. (2012). Viewing research and laundry from a different angle through peer collaboration. *Learning Learning, 19*(3), 51-52.

⑤ Vye, S. (2012).「IELTS with **埼玉大学**」『IELTS **白書** 2012』 (1),14.

⑥Vye, S. (2011). Autonomous language learning: A paradigm shift from teacher to learner control (Extended Abstract). *KOTESOL 2011 International Conference. Pushing our paradigms: Connecting with culture,19*, 314-316.

〔学会発表〕（計 11 件）

① Vye, S., binti Abd Halim, I. Kichuchi, T. Kojima, S. & Rahman, R. (2013, November 23). *Collaborative autonomy: Stories of flourishing learner development*. Exploring Learner Development 20th Anniversary Conference of the Learner Development SIG of JALT: Practices, Pedagogies, Puzzles, and Research. Gakushuin University, Tokyo, Japan.

② Vye, S. (2013, October 27). *Learning autonomously for language proficiency*. JALT2013 International Conference: Learning is a Lifelong Voyage, Kobe, Japan.

③ Vye, S. (2013, October 27). *Narrative learning transformations in a university learner autonomy seminar after the course is over.* LD-SIG Forum at JALT2013 International Conference: Learning is a Lifelong Voyage, Kobe, Japan.

④ Vye, S. (2013, October 12). *From learner autonomy in practice to learner proficiency in theory*. KOTESOL2013: Exploring the Road Less Traveled: From Practice to Theory, Sookmyung Women's University, Seoul, Korea.

⑤ Vye, S. (2013, March 16). *The power of peer collaboration: Proficiency and incidental learning at the same time.* National Lilly Conference on College & University Teaching: 25 Years of Evidence-Based Teaching & Learning, California State University, Pomona, CA, USA.

⑥Vye, S. (2012, October 13). *Autonomy makes difference in language proficiency?* JALT2012

Conference: Making a Difference, Hamamatsu, Japan.

⑦ Vye, S. (2012, October 14). *Learner driven development: Autonomy as they see it!* LD-SIG SIG Forum at the JALT2012 Conference: Making a Difference, Hamamatsu, Japan.

⑧ Vye, S. (2012, September 1). *University students learning autonomously and while improving in English as well.* ILA2012: Autonomy in a Networked World, University of Wellington, Wellington, New Zealand.

⑨ Vye, S. (2012, June 2). *Learners' collaborative action: This is what we want!* Nakasendo2012: Using English, Saitama, Japan.

⑩ Vye, S. (2011, November 12). *Learner autonomy and getting better at English at the same time.* IATEFL: Advising for Language Learner Autonomy 2011, Kanda University, Chiba, Japan.

⑪ Vye, S. (2011, October 16). *Autonomous language learning: A paradigm shift from teacher to learner control.* KOTESOL2011: Pushing our Paradigms; Connecting with Culture, Sookmyung Women's University, Seoul, Korea.

〔図書〕（計 2 件）

① Vye, S., Murase, F., & Edwards,A.Wurzinger, (in-press). Autonomy they ask: What is it and how does the learners' English improve? In A. Barfield, & A. Minamatsu (Eds.), Learner development working papers. Tokyo: Japan Association of JALT.

② Vye, S. (2013). Learning autonomously while improving language proficiency. In M. Hobbs, & K. Dofs (Eds.), *Independent Learning Association Conference (ILA) 2012 Wellington Conference Selections 184* (pp. 170-173). Wellington: ILAC.

〔その他〕

ホームページ等

① http://s-read.saitama-u.ac.jp/researchers/pages/researcher/TeUSsVBx

② https://sites.google.com/site/vyestacey/

６．研究組織

(1)研究代表者

Vye Stacey（VYE，Stacey）
埼玉大学・英語教育開発センター・准教授
研究者番号：50513868